朝日選書 166

中村光夫

近代の文学と文学者 上

中村光夫著

近代の文学と文学者

上

朝日選書 166

中村光夫〈なかむら・みつお〉
1911年(明治44)東京生まれ。東京大学文学部仏文科卒。現在，明治大学文学部教授。日本芸術院会員。
『中村光夫全集』全16巻(筑摩書房)他。

近代の文学と文学者　上　　朝日選書 166

1980年9月20日　1刷発行　　定価700円

著　者　中　村　光　夫

発行者　藤　田　雄　三

発行所　東京・名古屋 大阪・北九州　朝日新聞社
〒100 東京都千代田区有楽町 2-6-1
03(212)0131(代)　振替東京 0-1730

印刷所　共同印刷株式会社

© M. Nakamura 1980／装幀・多田　進　0395-259266-0042

目

次

序　芥川賞　七
文学とは何か　元
人間の内面と外界　三
言葉 I　四
言葉 II　四
リアリズム　五
明治をかえりみて　六
自然科学と自然主義　七
要求と方法の矛盾　八
戯作の行方　九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

北村透谷　一〇三
独歩と透谷の自然　一〇五
「人生に相渉るとは何の謂ぞ」　二一六
「明治文学管見」Ⅰ　二三四
「明治文学管見」Ⅱ　二三五
開拓者の時代　一四七
知識階級と文学　一四九
演劇改良の運動　一五一
翻訳小説と政治小説　一六九
『浮城物語』をめぐって　一七九
文学極衰論　一八七
没理想論争　一九七

下巻目次

進化論と美的生活論

樗牛の美的生活論　進化論の影響

『蒲団』をめぐって

「肉の人」の登場　小説の運、不運　『蒲団』の影響

小説の風土

私小説の典型三つ

『お目出たき人』　『別れたる妻に送る手紙』　『異端者の悲しみ』

三人の大正作家

永井荷風　有島武郎　芥川龍之介

近代の文学と文学者　上

序　芥川賞

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一

現代の日本で代表的な文学賞は、と聞かれたら、多くの人は芥川賞と答えるでしょう。

これは無条件にあたっているとは言えない答えです。芥川賞はもっぱら「新人」を対象とした文学賞で、一般の文学者は――すでに一人前になったという理由で――受賞の資格を失うからです。

一般の文学者を対象とした文学賞もまた沢山あります。なかにはその年度の最高の作品にあたえると謳ったものもあって、そこで選ばれた作品にくらべると、芥川賞の当選作はかなり見劣りするのが普通です。不馴れな新人のことですから、これは当然ですが、しかしそれが呼ぶ社会的反響は芥川賞の方がずっと大きいのです。

一般の文学賞の対象になった作品に対する関心は、文壇の範囲にとどまるのに反して、芥川賞の方は顕著な一般性をもっています。ふだんは、雑誌の小説だとか、文芸時評だとかを読まない読者も、芥川賞を取った作品となると、それじゃあひとつ読んでみようか、といった気持ちになるようです。これは『文藝春秋』という雑誌の宣伝力にもよりますが、それだけではないようです。逆に、受賞作を載せた月の『文藝春秋』は、編集の苦労はいらない、自然に売れるなどと冗談に言ったりしますが、恐らく事実だと思います。

そういうふうに、一般の人が関心を持つのは、どういうわけかと考えてみますと、これは何と言っても新しいものは文学の世界では一つの魅力だからでしょう。新人が登場すると、そこに文学としても何か新しいものがあるのではないか、と漠然とした期待をみんなが持つ。この期待は満足させられ

ても、また裏切られても、それぞれ話題になるわけです。またいわゆる技法の新しさでも、これまで文学にとりあげられなかった社会の断面であってもよいわけです。

それからもうひとつ、これと関連して考えられるのは、この作品の受賞によって今までいわば素人だった人に、いきなり職業的作家としての進路が開けてくる。少なくともその可能性を与えられる。今まで学生なり、サラリーマンなり、教師なりであった人が、たちまち小説家になる。そこに一種のドラマチックな興味がある。他人がそうなるのが面白いだけでなく、自分もできればなってみたい、というような気持ちを、強弱の差はあっても、誰しも持っているようなところがある。これを現代のドラマというとおおげさになりますが、あるひとりの人間の生活をかけた劇がそこに演じられる。これが芥川賞の、他の文学賞にない魅力でしょう。

しかし、新しい作家に、文壇に出る進路が与えられたということと、その作品が文学に貢献しているかどうかとは、別の問題です。

賞というのは、だいいち多数決できめるのですから、どうしてもいわば目鼻だちのいい、欠点が少ない、その代わりたいして強い個性もないような、よくまとまった作品が賞をもらいやすいのです。

ところが、そういう作品が文学として優れているかどうかは、これは少なくとも問題です。そういうつまり小器用に、こぎれいにまとまった作品だけが得をするというのでは、本当の個性の強い新人は、かえって圧迫されるのではないかと、こんなふうな議論をする人もおります。

これは確かに一理あることで、戦後の文学界を見ても、優れた作家だと思われる人で、若い時、文学賞をもらわなかった人、少なくとも芥川賞をもらわなかった人は幾人か数えられる。たとえば、

伊藤整がそうです。それから大岡昇平、三島由紀夫、こういった人たちは芥川賞をもらっておりません。そういう人たちが、新人として活躍した時に、芥川賞はなかったかというと、そうではない、あったことはあった。しかし、別の人にいってしまった。それが一つと、それから芥川賞は職業作家への道を、新人に対して開くというふうに言いますけれども、それでは芥川賞をもらってはっきり職業作家になれた人となれない人と、どちらが多いだろうかと考えてみますと、これは少なくとも半々だろう。職業作家という言葉をどういう範囲でとるかによって、それが半々になったり四分六になったりするでしょうが、とにかくみんながみんなるわけではない。職業作家にならなかった人を考えてみますと、そういう可能性がなまなか開けたような感じがするために、かえって自分の人生を壊されてしまったという人たちもいます。そういうことは、むろん賞の責任でもないし、まして選者の責任だなんて思ったら、選者は一日も務まりません。だからむろん本人の責任だろうと思いますが、賞をもらったことが、そういういわば悲劇の原因になっていることも否めない事実です。

二

そう考えると、賞の功罪は必ずしも一方的に決めるわけにいかない。しかし、むろんそれが芥川賞の存在を否定する理由にはならない。大きな社会的な影響を持つ仕事は、いろいろな意味で功罪半ばするのが普通である、ということが言えます。

芥川賞の場合、罪の方がもしあるとすると、それは社会的な影響が強すぎるところからきているようにも思われるのです。恐らく新人に対する文学賞が、こんなに社会的反響を呼び、受賞者の人生に

も影響する例は外国ではないでしょう。

また芥川賞の存在が日本の現代文学にかなり大きな影響力を及ぼしているのも事実です。多くの才能のある作家に進路を与えて、日本の文学を豊富にしている半面、文学運動を現代の文学界で非常に成り立ちにくいものにもしている。むろん、この文学運動が成り立ちにくいのは世界的現象であって、芥川賞のせいだけというわけではありませんが。

ご承知のように芥川賞ができたのは昭和一〇年です。僕がちょうど大学生のころで、主に菊池寛の提唱で芥川龍之介賞、それから直木三十五賞が並んでできました。選者は久米正雄、佐藤春夫、川端康成、山本有三、瀧井孝作などで、瀧井さんは今でも芥川賞の委員をなさっています。それから佐佐木茂索も加わっています。第一回の受賞作は石川達三の『蒼氓』、南米移民のことを書いたものです。直木三十五賞の方は、川口松太郎です。

ところでどういうわけで、こういう賞を作ったかというと、むろん雑誌社の仕事でありますから、雑誌の宣伝ということもあったでしょう。それから芥川と直木が相次いで亡くなったので、菊池寛がこの二人の名前を世間から忘れられないように、いわば友情の記念として作ったという私的な動機もあったと思いますが、それよりも、この賞の存在理由を社会にはっきり認証させたのは、だいたい昭和初年の日本の文壇事情があると思います。

文壇事情などを言い出したらキリがないし、私もそれほどよく調べているわけではありません。専門の本がいくつも出ていますから、そういうものに任せますけれども、ごく簡単に言いますと、昭和初期の文学は同人雑誌を中心にして出発しました。若い作家が同人雑誌に集まって、それぞれの主張

を掲げ、それぞれの運動を始めたわけです。それは小田切進さんの『昭和文学の成立』といった本をごらんになれば、くわしく書いてあります。

しかし、その同人雑誌は経済的にいうと、同人たちがお金を持ち寄って作った。「お前は今度一〇枚原稿を書いたから一〇円出せ」とか「二〇枚書いたから二〇円出せ」というふうに原稿料どころか逆にお金をとられてしまう。ですから職業としては成り立たない。みんな他の職業を持って、しかも文学に情熱を燃やしながら集まってくる。文壇の流行語で「食えない覚悟で文学をやる」というようなことが言われた時代です。当時は『改造』『中央公論』『文藝春秋』といったいわゆる大雑誌があって、そこに書けるようになれば、一人前の作家として世間も認めるし、生活も成り立つ目途がつくという時代であったわけです。

ところが、同人雑誌をいくらやっていても大きな雑誌からいつ注文がくるという目当はないわけです。ですから世間の評判を得て、それが編集者に認められ、大きい雑誌から注文がくるようになればいいけれども、そうでなければいつまでも同人雑誌をやっていなくてはならない、そういう状況に若い作家がたくさんおかれていた。

芥川賞は、まずそういう大雑誌と同人雑誌との間のギャップを埋める働きをしました。芥川賞をとれば大雑誌に書けるようになる、つまりジャーナリズムへのパスポートが手に入る、そういう性質を持っていた。

このジャーナリズムへの通行券を新人に与える、あるいは同人雑誌と大雑誌との間のかけ橋になるという性質は、今まで一貫していると思います。ところが今ではそれがいわば過熱してしまって、当

選しなくても候補者になると、出版社や雑誌社が目をつけて書かせてくれる。候補者になっただけで単行本が出たりしている。そういったことがごく当たり前のように行われていますが、これはどうも本人にするとずいぶん苦しいことではないかと思います。

ただし、これはちょっと今言ったことと食いちがうようですが、賞の建前としては、そういうことは考えないことになっています。どういう意味かというと、つまり受賞を決定するために、この人は作家としてやっていけるだろうかどうかということを考えるということは、これは人力の及ぶところでない。どんなに考えても、ある作家の将来、ことに新人の将来を一作や二作で占うということは、これはでき得べきことではない。ですから、芥川賞の建前としては、そういうことは一切考えずに、ある作品の質をまず見る。その作品が優れていれば、たとえその作家があと何も書けずに終わったとしても、それはそれでいい。つまり純文学の作品というものは、他のことを考慮しないで評価して、決めるよりほか仕様がない、ということになっているわけです。

これは矛盾するようですが、これ以外に仕方がないし、また、これでやってきて何十年かを経て、恐らく一番間違いのない方法だろうと私なども思っております。これに比べますと、直木賞の方は——この人は職業作家として立っていけるかどうかということを十分に考慮して決定するということです。しかし、芥川賞の場合は、それを考えない原則は今でも貫かれています。これは考えてみますと、純文学と大衆文学の差異の面白いところではないかと思います。いわゆる純文学というものは、人から見て予想がつかないだけでなく、作者自身も極端な言い方をすれば、その次何を書くかは予定が立たない。一作一作が未知への一歩であって、新しい冒険であるような、そういうものが文学だ、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.